

わるい夢に見た奴としてさ、彼奴を忘れて仕舞ッて下さい、今更ら無理だらう、無理は知ッてるが無理にも彼奴を忘れて貰ひたい、つまり結局は彼奴を助けてヤッて下さい、この上また彼奴を優しい奴にしては困る、是非とも彼奴を無情な男にしてほしい、その代り我々が彼奴に必ず、きツと、それだけの事をさせます、また今後あれが萬一もし他の女に關するやうな事があツたら畜生、今日こんな辛い役目に逢ッた我輩が第一、捨てて置かない、せめての申譯だ、萬事の後始末は我々が引き受けた、ウンと承知して下さい、實は本人の長谷川を連れて來ようと思ツたがね、こゝに彼奴の面があツちやア、擲りたくなるかも知れないから、わざと一人で來ましたよ、林、松浪、菅沼、いづれも同意、長谷川の彼奴、かはいさうに今ごろ此方角に向ッて男泣きに謝ッてるだらう、あゝ長らくの間、相済みませんでした、もうこれ以上、この村田にいふべき言葉がない」

袂の端を破るゝばかりに嚙んで打伏せしが、わツと俄に聲を放つや否や、平生の憤み深き身も忘れて頑建の膝に取付き、

「む、村田さん、わたし、わたし、どう致しませう」

取付かれし頑建また思はず泣聲を漏らしながら、

「察しる、察して居ますぞ」

「も一度、もう一度、お目にかゝりたる御坐います」

「逢はすとも、三度でも四度でも逢はして、いや、すぐ今夜これから呼んで來る、待ッてなさい、すぐだ、すぐだ、すぐに呼んで來て三人で、猶よく話さう、タクシーに乗せて來るから直だ、待ッて居なさいよ」

そのまゝ戸外に飛び出せし頑健君、曾て亂暴壯士四人に押し込まれし談判最中、ぶツと放

屁一發の悪洒落を演ぜし男なれど、今この時ばかりは眞面目に泣いて額に苦しげの汗びつしより、

上野櫻木町、長谷川の奥座敷に村田の頑健君、わざと主人の不在を覗ひ、女子の學校時間を考へて、實は細君を相手に例の妾宅一件、されど顔色にも出さず、つい何氣なく立寄りし體、

「今日は主人公、どこへ出ましたね、はゝア朝早く大森へと言つて、なるほど、や、わかりました、あのこつたらう、なか／＼近來は働きますな」

「働くのか遊んでるのか、さつぱり分らない人で御坐いますよ」

「なアに其處が長谷川さ、つまり日曜だけ自分の身體になる月給取ちやアありませんから

ね、第一巨萬の財産もないものが實際に遊んで食へますかね、間斷なき時計の秒に事ばれて動く人間よりは寧ろ頭腦の中は忙しいンですぜ、御如才はないが奥さん、浮世の波風を渡る良人の楫は妻にありだ、多少の氣に入らない事があつても、大目に見てやつて下さい、あれで随分、人の知らない頭腦を使ひますからね」

「ほゝゝゝ、まるで私が、他人のやうで御坐います事」

「これは失禮、こりやア悪かつた、はゝゝゝいはゆる釋迦に説法を試みた失策だ、をりをり此奴、かういふ餘計な饒舌り過ぎをして困る、はゝゝゝ」

「いゝえ村田さん決して、さういふ譯ちやア御坐いませんよ、萬事この通り行届かないものですから、只今の御言葉は有難く、お聞き申して居ります、就きましては近來、長谷川に何か私の知らない、深い心配でも御坐いますの」

待ち受けし頑健君、吸ひかけし糞を灰の中に突ツ込み、おもはず膝を進め、俄に聲を低めて細君の顔色を額越に見上げながら、

「奥さん、御存じでせう、例の事を」

「何をで御坐います、例の事とは」

流石の頑健君も直接の無遠慮に口へ出し兼ねて、ちよいと世間的に左の小指を差出し、

「これ、銀座裏の、これを」

わづかに左の小指一本は、深酷の意味を帯びて細君の目に映じ、ちらと掠めしまゝ差俯きし胸中より如何なる一言を吐くかと思へば、うすく顔を赤めながら、わざと微笑を浮べて、

「存じません、一向知りませんよ」

頑健君、何物にか頭上を厭せらるゝが如くに首肯いて、

「えらい、知らない筈のない貴女が六年間よく知らずに居なすつた、どれほど謹慎が深くツても自然の人情で黙ツて居られないところを、今日まで顔色にも出さず黙ツて居られたのは實に大なる力だ、その力に長谷川も、あの女も、雙方とも心の底から悔い改めて貴女に謝罪すべきを兎も角まづ、この村田が引き受けて來たのです、どうか今までの事は一切、許して戴きたい」

「あら、村田さん、そんな事を仰しやツては、困りますよ、私は、長谷川の妻として、また無事に育ツてる一人の娘の母として、何の不足もなく、これで満足して居るんですから、その外の事は」

「いや、さういはれては此方が困る、實は、もう既に切れたんですよ、長谷川と、あの女の關係は立派に、きれいに絶ツて仕舞つたから、この村田が二人の名代に來たんです、

もし貴女さへ差支ないといへば、長谷川は勿論あの女も連れて来て面前で、あやまらせ
 ますぜ、實は奥さん、お目にかゝつて、これまでの事を、おわび致したいと言つて居り
 ますぜ、あの女が、今こゝでいふと變ですが、ありやア世間普通の所謂妾氣質に出来
 て居ない女といふだけの一言を、この村田に加へさして下さい、どツちかといへば、あ
 はれに生れたかはいさうな女だ、罪は正しく長谷川にあります、長谷川また世間普通
 の妾狂ひといふでもない、つまり一種の悪縁に繋がれたやうなもので、その間には、
 いふにいはれない事情もあるらしいから、まア奥さん、これで過去の一切を帳消しにし
 てやツて下さい」

静に差俯いて聞き居たりし細君、そのまゝ村田の顔も見ず傍の茶器を引き寄せ、急須に湯
 を注ぐ間の一思案、やうく口を開いて、

「村田さん、さう承ツては、もう何事も私から申し上げられませんし、また昔の小説
 や浮瑠璃なにかにあるやうな、わざとらしい義理立も致し兼ねますが、全體、切れたと
 いふのは、どういふ切れようで御坐いますの、長谷川からですか、それとも、お玉さん
 の方からですか」

「や、お茶といふ名まで御存じですね、こりやア恐れ入る、ぢやア無論、どツかで本人も
 御覽でせう」

「そんな事を今、村田さん、ほゝゝゝ」
 頑健君、ちよいと小首を傾けし後、

「長谷川からですよ、第一、長谷川が貴女に濟まないといふ次第で、今度の決心が實行さ
 れたのですよ」

「それでは村田さん、お玉さんが、お氣の毒ですね、實を申せば内々これまでに十分お玉さんの事は、よく調べても見、また探しても見て、つまり安心して居ったのです、その六年間も神妙に、あゝして居た女を、自分の方から勝手に切れる以上、それだけの事を長谷川に、させなくてはねエ村田さん、たゞ切れたではいけませんよ、これは私が申したといはずに、どうか長谷川の顔の立ちますやう、ついでには、お玉さんの身も立つやう、立派に出来るだけの事を村田さん、無理にも長谷川に、さして戴きたら御坐います、甚だ立入って餘計な、生意氣な出過ぎた事を申すやうで御坐いますが、たとへ借金はいたしても、その借金は陰ながら私が引き受けますから、萬事、見苦しくないやう村田さん貴君に、お願ひ致して置きます、何故、あゝいふ女が運わるく妻子あるものン世話になつたでせう、實に女は、弱いもので御坐いますねエ」

頑健君共まゝ、急に坐を立って、

「奥さん、長谷川は借置き、お玉に代って感謝します、實は我々五人で、あれを他の良縁に付ける相談最中ですが、たゞ後日のため貴方に對して疚しくないやう御挨拶に来たんですよ、これで四方八方の天下泰平だ、あゝ世間の理も非もなく亭主の胸倉を取る喚ア共に貴女を拜ませたい、さよなら、萬歳々々」

すたゝ出て行く頑健君を女關まで見送りし細君、

「どうか林さんにも、松浪さんにも、菅沼さんにも、とんだ御心配をかけたましたと、よろしく、また長谷川に一二週間旅行でもするやうに貴君から、おすゝめ下さいましたな」

頑健君、目に涙を含んで幾度か振り返りながら、我身の如く、

「ありがたう、ありがたう」

上野の櫻木町を出でて近き根岸の我家にも歸らず、そのまゝ電車の便に赤阪の松浪方、ここに本人の長谷川を始め林も待ち受けて、菅沼だけは他に急用ありとの事、

頑健君、まづ使命を辱しめざりし意氣揚々と坐に入りしが、はや既に相變らぬ酒の香を好しからぬ鼻頭に嗅いで、妙な面をしながら俄の大聲に書生を呼び、

「おい君、早く出してくれ、使者を頼ふ主人の好意で、うまい菓子は取つてある筈だ、菓子その後で鰻の大串も三人前ぐらゐ注文してある筈だ、急いで頼むぜ、腹が減つた」

「君、御苦勞だつたな」

「御苦勞は宜いが、おい長谷川、貴様ア實に幸福もんだぞ、がらにもないくせに妾を持て

ば、あゝいふ妾を掘り出すし、鳴アを持てば、あゝいふ鳴アを持つてさ、それで金を持てば生命が無くなるだらう」

その隣席は林鶴雄、

「心配するな大丈夫だ、長谷川は五人の中で一番ぐづぐづと長生しさうだよ」

主人の松浪は手にせる盃を飲みもせず置きもせず、無心の宙に持ちながら、

「冗談は兎も角、どうだつたい、大した低氣壓もなく無事に治まつたかね」

頑健君、頻りに感歎の首を振りて長谷川を尻目に向け、

「現在この男を置いて言ふのも變だが、實に細君は當世に珍しい出來物だよ、あれが全く良妻と稱すべきだね、一言もない、つまり賢婦人だよ、どう間違つて来たか長谷川には勘くも二三段の過ぎもんだ、生涯の正妻あれで六年間の愛妾あれとは此奴、けしからん

よ、その上また我々をして餘計な心配さすに至つては、ます／＼癪に觸る奴だぜ、おい長谷川、これから我々が相談する事に就いて口を出しちやアならないぞ、無論、可否の權利もない、我々に任した以上、たゞ謹聽して我々のいふ通りになれば宜いんだ、實は此處に居ない方が宜いくらゐだ」

林は例の反身に天井へ吹き出す高笑ひ、

「はッはッはッ、よほど癪に觸つたと見えて、酷く當るね」

「當らざるを得ないよ、此奴のため銀座裏では、あの哀れッぽい、かはいさうな、いちらしい女に、さんざ泣かれてさ、自分の深い情夫と手を切るよりも辛い思ひをした結局、また今日は眞正面から理窟の言へない本妻に對つて、自分が悪い事でもしたやうな謝罪的の役廻りを勤めて來たんだもの、いはゞ御馳走を長谷川が食つて、その膳椀の後始末

だけ、我輩がさせられたンだからね、は／＼／＼よく出來てるわい」

松浪も笑ひながら片手に軽く頑健の肩を叩き、

「おい／＼さう愚痴をいふない、何かの報いだ、そのくらゐの役廻りは當然だぞ、ところで長谷川の細君いよ／＼文句なしとすれば、猶更おほびらに公然と世話して至急、どツか良縁を求めてやらうぢやないか、どこへ遣つても、あれなれば容貌といひ氣質といひ、人の妻として殆ど缺點なしだ、やはり良妻の部だよ、なア林、さし當り貴公の方に誰か好い心當りは無いかね」

「ある、あるよ、幸ひ我輩の自由になる奴で、目下まだ無妻の心當りは三人あるが、一人は聊か身體が弱くて、頗る神經過敏に取越苦勞の多い人間だから、間違ひは無からうがあまり前途に發展の餘地がない、のみならず母親が世間知らずの田舎婆で、おまけに大

の喧まし屋と來てる、あれのために幸福ぢやアあるまい、今一人は無頓着に飾りツ氣のない面白い男だが、その面白さが妙に面白過ぎて、實は少々頑健君に似てるところがあ
るからね、こりやア考へもんだよ、は、は、は、とところで最後の一人、五年前の帝大法科を
出た辯護士だ、これが我輩、どうかと思つてる、なか／＼才物でね、絶えず新しい本も
讀んで、しつかりしてる奴だよ、貧乏は仕方がない、まだ世の中へ出たばかりの、ほや
ほやだからな、あれで尻に付いてる卵子の殻でも取れりやア、一人前の男になるだら
う」

頑健君、苦笑ひの頭を振つて、

「面白さが僕に似てるといふ點で落第した奴は氣の毒だな、は、は、は、しかし林、今いふ辯
護士は無効だ、いかなぜ、いくら人間に見込があつても職業に權威があつても、あの女

は君、辯護士の妻には慘酷だ、ありやア理の女でなく情の女だからね、情に深く情に脆
く情に泣く女だ、常に絶えず原被兩告の争ひを業とする辯護士の家には相應しないよ、
つまり本人の苦痛だらう、第一また其辯護士が君の意に従ふといふのも程度問題で、一
旦人の妾となつた女を喜び迎へるや否や、これまた先決問題だ、よほど相手を調べて見
ないと、むづかしいぞ、たとへ内實は案外の被せ物でも、處女の初婚といふ觸込が世間
一般の最大條件だからな、あれだけの女に、この取消し得ざる一大缺點を與へた長谷
川、ます／＼深い罪だぞ」

長谷川猛郎、無言のまま差俯きし體を慰め顔の松浪憲太郎、

「頑健また始めるよ、過去は過去で葬つて仕舞へ、三人も五人も勝手に亭主を取替へて小
皺の寄つた女でさへ平氣に大手を振つて嫁に行く今日だ、さう狭く見るに及ばない、ま

して容貌性質あれだけで十分、六年間の過去を取消し得るよ、立派に取消して餘りあるよ、寧ろ相手に依つては六年間、人の妾となつて居ながら實際あの珍らしく神妙にして居たところを、買つてくれる男がないとも限らない、或意味に於ては最も女の危かるべき點に最優等の好成绩を擧げて來た試験済の女だもの、我輩まだ無妻の身であれば、大に喜んで安心して迎へるね、どうだ林、君も同感の歓迎組だらう

「歓迎したくツても、お互に出來ンぢやないか、はゝゝゝ、ところで松浪、貴公の方に心當りはあるかね」

「さし當り今こゝに無いが、キツと我輩、搜し出して見せる、ありのまゝに打明けて談ずるに足るだけの相手を必ず搜し出さう、貧なりと雖も我々五人が力を盡せば、あまり見苦しくもない仕度をさして、相應の相手が出来ようぢやないか」

無言の長谷川、たゞ一言、

「すまないなア」

頑健君また尻目にかけて

「長谷川、それだけで宜いぞ、黙ツてろ、かうなれば、もう貴様の妾でない、我々が等分に引き受けた女だ、それに就いて聊か氣の毒だが、貴様の前で困る相談がある、ちよいと階下へ降りて居てくれ、しかし無斷で歸る事はならンぞ、やはり貴様のためだよ、氣を悪くせず、暫くの間、外してくれ」

長谷川また今この場に異存をいふべき筈なく、其まゝ降りて行く後姿を見送りて頑健君、急に聲を潛めて林と松浪に對ひ、

「外のこともないがね、實は、かはいさうだよ、長谷川だつて本心に喜んで別れる筈は

なしさ、女は猶更だ、ところで、どうだらう、これが六年間の楽しみ終めとして一週間ばかり、どツか旅行さしてやらうぢやないか」

「そいつア、いかなね、かふいふ談話にならない前なら兎も角、それぢやア、長谷川の唄アを我々が踏み潰すやうなもんだ」

「いや大丈夫、長谷川の唄ア案外、なか／＼素人に似合はない捌けたもんだ、乃公を立關まで送り出した時、さういふ工合に本人へ勸めてくれと言つたよ、たとへ心の底は、さうでなくても、萬事に遠慮のない乃公に向ひ立派に口へ出した以上、今更ら野暮に物堅く妙な義理立をするに足るまい、此ま、追ッ放して遁げる氣遣ひはなしさ、無論また情死するやうな恐れもなしね、は、一週間を限ッて新婚旅行の反對に縁切り旅行を、さしてやらうぢやないか、放蕩息子の意見たア違ふぜ、少しは粹を通してやれよ」

「ぢやア村田、貴公一人で責任を帯びろ、敢て君に荷を脊負はせる意味でない、長谷川の唄アに言質を取ツて来た君が一料筒で遣つたとして置かないと、後日この我々二人のいふ事に押目が利かないから」

「よし、承知した、乃公一人で引き受けた」
其ま、階下に降りて、

「おい長谷川、どこに居る、出て来い、世話の焼ける奴だ」

朝の國府津行二番の發車前、東京驛に俾を馳せ付けて、後をも見返らず其ま、足早に入りしは村田の頑健君、薄茶の中折帽を鐙下りの無難作に被り、小春日和の輕きインパネスを長羽織の如くに開け放ちて纏ひ、貰の煙を背後に引きながらステツキを前に急いで一二等

の待合室より婦人室を隈なく差覗きし後、俄に歩みを緩め、ぶら／＼と人待顔、待つ人は來らずして、馴々しく近付きし洋服の當世男、

「村田さん、どちらへ」

見れば或新聞記者といふだけの見覚えはあれど、さて何新聞の何といふ姓名やら、乃公に思ひ出されぬ奴、どうせ埋め草の雑兵葉武者と心得しが、かういふ奴ほど蒼蠅く、わけて面倒なりと、帽子の廂に手をかけながら、

「やア暫く、どうですな近頃は」

これは頑健君、わからぬ奴へ不意に出喰せし時、誰彼なしに千篇一律の挨拶なれど、うけし本人は満面の愛敬、

「どうも、かうも相變らずの平々凡々で、やはり毎日この通り走り歩いて居ります」

「しかし萬年筆と靴の損じるのが即ち君等の職務で、いはゆる權威ある誇りだからな、はは／＼」

「うまい事を、我々の同業者で評判になつて居ますぜ、うま／＼その手で貴君には遣られると」

「うまい事は君等の本職ぢやアないか」

「その本職が、やられるから恐れてゐますよ」

「おい君、いゝ加減にして貰はう、ぼか／＼と暖かい小春日和だ、この上、のぼせちやア堪らない、は／＼、時に今日は誰か運わるく君の筆にかゝる奴がありますな、それがための待伏でせう、罪の深い職業だ」
「なアに社用で、ちよいと國府津まで」

「國府津、はゝア箱根の紅葉でも」

「なか／＼紅葉どころですか、つまらない事で日歸りの飛脚です」

つまらない此飛脚野郎と語りながら、じろ／＼四邊を見廻し頑健君、俄に相手の肩を軽く叩いて、

「君、また其うち、失敬」

足早に去りて、待合室に入らむとする束髪の背後より、

「お玉さん」

振返りしは長谷川の愛妾、愛妾といへど、實は既に涙の縁を切つて、この後いかに成行くやら今は運命の神の手にある美人、それを暫く我手に預かりし頑健君、聲をかけしまゝ、踵を返して國府津行の白切符二枚を購ひ、また待合室に入れば、片隅に

小さく身を縮めて差俯ける姿、

小荒き大島の袷に小柳の無地帯、見苦しからねど、これを今日の晴衣とすれば、どこに一點の光るものなく、どこに當世風の色彩なく、總ての粧飾美なき天生の美は猶更ら際立ちて、うす隈の中に名畫の浮き出でたるが如き容貌、

頑健君の立寄りしを、會釋しながら見上げて、

「大變、お待ちせ致しまして」

「なアに發車に間に合へば宜い、まだ五六分あるからね、ゆツくりなさい、何を買ツて行きませうか、すきな菓子でも、途中で泣かないやうに、はゝゝゝ」

「また村田さん、ほゝゝゝ」

「ありがたい、出がけに笑ひ顔を見たから今日は大丈夫、まア安心だ、おまけに天氣は好

し、全くの秋日和で、サツと此まゝ京阪へでも遊びに行きたい気がする、實際これで二人とも往ツて仕舞ツたら、どうなるだらう、面白からうなア、あとの騒ぎがね、はッはッ〜」

いつそ騒がしてやりませうかといふ洒落も冗談も出ぬ女、あまり頑健君の無遠慮なる高笑ひに、ます〜室内の視線を集められて、猶更ら伏目勝の美貌を横に沈めしが、はや發車時間に迫り、手に渡されし切符を見るや否、

「あら、わたし、これではなくツても」

「なアに蒼蠅い奴が二等に乗り込むからね」

汽笛一聲、ブラットホームを離れし車中、平常の頑健君に似合はず、頻りに優しく慰め顔に聲を低め、

「何事も我々四人で引受けた以上、あまり深く餘計な事を考へない方が宜しいぜ、決して悪くはしないからね」

「ありがたう、御坐います、かうなりました上は猶更、萬事お力に致して居ります」

「宜いとも、宜いとも、實は東京でも宜いのだが、妙なモンで、いはゆる心機一轉だ、やはり土地が變ると氣も變ツて、くさ〜しないからね、兎も角も當分まア二三日、ゆツくりと箱根の秋景色でも見て心を落着けるのさ、松浪も林も菅沼も前夜から泊りがけで待ツてるよ」

「皆様に、とんだ御心配ばかり、かけまして」

「なアに當然さ、長谷川のすべき事を本人ぢやア却ツて、仕憎い點もあるから四人が代ツて、つまり六年間の申譯に出来るだけの跡始末をするんだ、實は四人とも今では、自分

の妹と思ツて居ますぜ」

無言のまま首垂れて、ほろりと落せし涙に、おもはず顔を反けし頑健君、ふと見れば、彼方の隅より葉巻の煙を吹きながら目鏡越しに笑を含みて、じろくくと打成りし四十あまりの紳士、不意に彈丸を放つが如く、

「やア」

頑健君また同じ挨拶、やアの一言に立ツて近寄れば、そつと袖を引きながらの小聲、
「村田さん、ひどいところを見せますな、奢らないと奥さんへ内通しますぜ」

「はゝゝゝ、さういふ女でないですよ」

「どういふ女か知りませんが現在の證據は免れますまい、しかし美人ですな、あれだけの美は一流の藝妓にも珍らしい、どこから掘り出しました」

「こりやア宥罪だ、實は友達の妹で今日、これから國府津の或別荘まで送り届けて、縁談の見合をさすといふ神聖な取持役でね、たまには、こういふ神妙な事を真面目に勤める男とは、始めて分つたでせう、御親切があれば吹聴して下さい、はゝゝゝ加之も當世流に加工した人爲的の粧飾は一切ぬきにして、生れたまゝの木地を自慢に連れ行くところ、即ち村田式ですよ、あれで優しく靜に温順の性を備へて一點の虛榮心なく、少しも生意氣に出來て居ないとすれば、どうです」

「全く、さうとすれば甚だ失禮な事を、しかし村田さん、何だか妙に持つて廻つて、お手盛の口上が多いやうですな、はゝゝゝ國府津の別荘は大方、知ツて居ますが全體、どこ

の誰です」
頑健君、うツかり饒舌り過ぎて、しまつたといふ顔色、

「いや、それは今、ちよいと言ひ兼ねますよ、たゞ今日のところは見合ばかりで、まだ實際に極らないんですから」

意地わるく附け込む紳士の苦笑ひ、

「この汽車は國府津までですから兎も角、御一緒に降りませう」

もしこれが互に人目を忍びて落ち行く旅ならば、前後二人の敵に見付けられし頑健君、國府津に着きし時、わざと後れて人混に紛れ、例の新聞記者も紳士も後を見返り勝りに去りし後、やう／＼驛外に出づれば、そこに立てるは長谷川猛郎、

「おい村田、君、君、そゝ其女を連れて來たのか」

「あらッ、貴君」

雙方の驚きしも道理、長谷川には松浪と林と菅沼の三人を連れて來る約束、女には以上三

人が國府津に待ち受けて箱根へ行くとの約束、この間に挟りながら、さも愉快げに笑を浮べて、

「どツちも黙ツて、黙ツて來れば宜いんだ、黙ツて來れば分るよ、乃公の物をいふまで黙ツて居てくれ」

二人を並べて中央に歩みながら、右に向いて、

「何だい長谷川、變に妙な目をして睨む奴があるかい」

また左に向いて、

「村田が付いてる、心配しなさんな」

ステイション前の旅館を兼ねて休み茶屋、その庭傳ひに奥まりたる離れ座敷に入りて、

眼下に海は見晴らせど不審の眉の晴れざる二人に向ひ、

「さて村田健、あらためて二人にいふが、今日から二週間、どこへでも勝手に好きなところへ往け、足るまいが金は三百圓こゝに用意して来た」
懐中より新聞紙に包みしまゝ差出して、左右を見比べながら、

「まさか此まゝ何處へ遣つても情死する恐れはなし、はゝゝゝ二週間と云へば必ず二週間目に乃公の顔を潰さず、きつと歸つて来るものと安心して居るぞ、その間ア泣くなり笑ふなり取ツ組合でも引ツ掻き合でも、生命だけ無事に何とでもするが宜い、今更義理だの瓜絲だのと心にもない世間體の屁理窟を言ひ出すと承知しないぞ、かうするまでに實は、いろ／＼と考へて、どのくらゐ考へ直した結句か知れないんだ、おい長谷川、家の事は氣にしくつても宜いからな、せめて二週間、この女を最愛の妻として慰め得らるるだけ慰めろ、かういふ女を六年間も日陰に埋めて置きやアがつて、すまないぞ、また、

お玉さんも行末の事、決して案じるに及ばないからね、この二週間は誰に遠慮もなく好きな真似をして、いふだけの無理もいふし、おもふまゝに駄々を捏ねてやりなさい、今までの腹癒せだ、なアに少々ぐらゐ長谷川の身體へ疵が残つても宜しい、口惜しければ手でも足でも喰ひ付いてやるさ、はッはッはッ、冗談は措いて、二人の歸つて来るまでに我々四人、ちやんと出来るだけの事はする小算だ、それで立派に、きれいに、さッぱりと、實際に別れて、一時は悲しからうが結局めでたく納めやうぢやないか」

長谷川猛郎、おもはず頑建君の手首を握りて、

「村田、歸るまでの間、此まゝ無言の奴にして置いてくれ」

「さうだ、いふに及ばん、きくに及ばないが、この三百圓で足らなきやア何處からでもウナ電報を打てよ、この二週間は貴様の生涯またと再び金で買へない二週間だ、もし貴様

が文士でもありやアこの二週間の露けき秋の哀れを帯びて猶更の事、それこそ悲しい
嬉しい苦しい人情のいふにはれない極を穿つた斷腸的の悲哀小説が出来たらうな
ア、しかし長谷川、をかしく變に小説めいてくれちやア困るぜ、やはり少しは平常の朦
朧を加味した方が安全だ、はゝゝゝはゝゝ」

笑ひながら此方を見れば、この場合この女として涙の外に何の言葉もなく、たゞハンカチ
ーフを顔に押當てゝ忍び音に泣けるのみ、

「お玉さん、わかつたでせう」

「はゝ」

「この二週間は、長谷川に妻も子もありませんよ」

「村田さん、村田さん」

「何ですな」

「この御恩は、生涯」

「なアに馬鹿な事を、つまり二週間の旅で長谷川の罪を幾分か差引いて貰はうといふ蟲の
宜い友達さ、はゝゝゝさう陰氣に沈まずと、面白くね、おい長谷川、貴様は妙な顔して、
ぐづぐづしてるからだ、さつと立てよ、どこまで世話を焼かすんだい」

次の汽車を待ち受けて直ちに東京へ引返せし頑健君、まづ松浪の家に飛び込むや否、

「上首尾、うまく遣つたぞ」

「御苦勞だつたな、定めて二人とも、喜んだらう」

「これで怒られちやア堪らないよ、たゞ何でもないやうで實は、なか／＼骨が折れたぜ、

おまけに汽車の中で、とんでもない奴に冷されてね、は、は、は、

「當然さ、貴公あの女を連れて顔の知ってる奴に出喰せば、誰だつて怪しむよ、どうせ黙ッてる筈がない」

「乃公の妾とでも見たかな」

「なアに人の妾でも欺して連れ出したと見たんだらう、得心さして来たとは逆も思へないからね」

「やれ、しかし二人とも今日といふ今日は實際、心の底から感謝して居たね」

「どこへ旅行すると言った」
「二人の手に手は取らしてヤツたが、そこまで野暮に差圖したり問うたりするかい、どこへでも勝手次第さ、だが察するところ十中の八九、京阪だらうよ、あのまゝ函根や東海

道の近くに居ちやア、誰に逢はないとも限らないからね まづ兎も角あゝいふ情愛に最も背景の適した京都が重で、大阪よりも寧ろ奈良邊の靜かな秋に旅寢の空を泣いたり笑ったり、悲喜こもゝの二週間、つまり現代式の梅川忠兵衛さ、つかひ果して幾何、残して来るかね、は、は、は、考へて見ると長谷川の朦朧め、なかゝ意氣な男に出來てるよ、加之も嗚アの嫉妬ない貞女な工合は紙治も兼ねてるからね、嗚アといへば此まゝ捨て、も置けないだらうな」

「今度の事だけは始めから一人で引受けた貴公の責任だ、黙ッて居ては、いカンよ、二週間も歸らないんだからね、ちよい立寄ツて、何とかいはなければ」

「どうも悪い役廻りばかり背負ひ込んだよ、あの細君なかゝ捌けて居て今度の旅行も實は、その口から乃公に是認した言質もあるは、あるがね、お言葉に甘へましてといふの

も變だし、うツかり取適したともいへずさ、こりやア困ツた」

「なアに外の人間と違ツて、貴公のいふこツた、どんな亂暴に出ても平常お株を賣ツてあるから大丈夫、仕方ないとして諦めるよ」

「亂暴の株は酷いが、まア宜い、捨てても置けないから歸途に何とか、ごまかさう」

根岸への歸途、櫻木町の長谷川方、サツと其まゝ通る筈の頑健君も今日は聊か遠慮勝に差覗けば、幸ひ庭前に細君の姿、女關の横手より離根越に首を突き出して、

「植木の世話ですかね」

「おや村田さん、まア貴君お上り遊ばせ」

「いや、ちよいと、こゝから、え、長谷川、居りますまい」

「今朝、早く出まして」

「實は奥さん、それに付いてですが、急に京都まで、委しい事は電話で、さよなら」

すたゝ通げ出して我家に歸れば、我家の細君また待ち受けて、

「只今、櫻木町の奥さんから電話で御坐いますよ、良人の御歸宅次第すぐ電話口へ出ていたどきたいと、長谷川さん急に京都へ往らしたんですか」

頑健君、おもはず面を皺めて舌鼓、

「どこへ立廻ツても乃公ばかり苦しむんだな」

已むを得ず電話口へ呼び出して、

「やア先刻は失敬、つまりね、かうですよ奥さん、こりやア外の細君なら飽くまで秘して、いはない筈ですが、貴女だから寧ろ打明けて、露骨に、實は、そら、例の女ね」

ふと背後を見れば、目を圓くして立てる我妻、

「おら、お前そこで聞いて居なくても宜いぢやアないか」

「聞いて居たツて、よろしいぢや御坐いませんか」

「しけな」

「ほ、ほ、いけませんか」

「馬鹿、いけないから、いけないといふんだ、あツちへ行けツ、は、は、聞えましたか、いや何、別に喧嘩でもありませんがね、は、は、やはり明日の朝、あらためて此方から出ませう、出て委しくね、お話しすると極めませう、え、え、貴女が今、すぐに來られるんですか、困りましたな、なアに困る事ありませんがね、ぢやアお出で下すツて宜し」

その電話を切るや否、俄かに松浪を呼び出して、

「おい松浪、すぐに來てくれ、どうも一人で心細くなツて來たよ、うかくすると内外一時の敵だ、は、は、は」

大正五人男いまだこゝに書きすといへども、一段落これを前編の終りとして、試みに五人の心理状態を解剖し各その性格の一端を掲ぐ、

林 鶴 雄

動もすれば世間この人を以て紅燈綠酒の間に耽溺せるものとし、づる雄君の名は、品行方正の反對に呼ばれ、粹林君の名は謹嚴寡黙の反對に稱せられ、殆ど當代の放蕩家たるが如くに喧傳せられるれど、實は偽善者と偽君子の多き今日の表面上より比較せられたる結果にして、つまり誤魔化し細工の人工美を施せる女優的色彩中に生れしまゝの木地を以て立

てる婦人の如し、もし林鶴雄君その人を知らむとすれば、まづ今日に於ける社會の裏面を
 知りて所謂紳士なるもの、假面を剥ぎ取りし後、彼を公平の眼底に映寫せざるべからず、
 蓋し彼は案外の正直なるがため、却て案外の不正直なる世間に容れられず、あまりに飾り
 なき赤裸々を遺憾なく曝け出すがため、あまりに飾り多き今日に珍重せられず、その誰に
 向うてもお世辭をいはざる無遠慮と無頓著とは、ますくお世辭を以て人を喜ばし人を祭
 り上げむとする今日の處世術に背弛して、いよく世間一般の御機嫌を損じ、たとひ自己
 の利益を抛ちて稜々たる一片の俠骨より出でし事も、自己の利益以外に何物もなき殘忍酷
 薄の犠牲物とせられ、加之も心に疚しからざる彼の恬淡快活は、また其後の悠々たる點に
 於て太い奴と誤られ横着物と稱せらるゝに至る、
 もし今日の世間を以て君子に似たる小人の多き實例を擧ぐれば、彼は寧ろ小人に似たる君

子の部に屬すべし、もし今日の裏面に跳梁せる惡黨の多き實例を擧ぐれば、彼は寧ろ惡黨
 めいたる善人の部に屬すべし、もし今日の如く社會の闇黒面に斬取り強盜の多き實例を示
 し來れば、彼は寧ろ巧みに世間を欺き法網を免れて猫婆を極め込む事の出來ざる人間な
 り、もし今日の標榜せる宗教家を打算して其差引勘定を明白にすれば、彼は寧ろ或意味に
 於て大悟徹底せるところあるべし、彼を其まゝ修身講義の實物教育とするには頗る缺陷の
 多きを見出せど、あのまゝ彼を一世の好漢とすれば恐らく如何なる試験上にも決して落第
 するものにあらず、たゞ彼の忌憚なき一擧手一投足に現はれたる點を以て酒色の徒とし花
 柳界の放蕩兒とするは、いはゆる衆盲の大衆を摩するが如き類にして、彼の本領と彼の全
 般は世間の批評に關せず彼みづから毅然として彼の持するところあり、世間に向うて彼の
 眞意は常に曰く、お世話さま、

村田健

これまた今日の世間には頗る不向の人間にして、いはゆる頑健君の名を其まゝに押通して、いかなる場合も世間の流行を逐はず世間の嗜好に投ぜず、なか／＼容易に人のいふ事を聞かず人のする事を真似ず、事々物々、自己の考へより割出して、その割出せし結果の利害得失は措いて論ぜず、寧ろ論ぜざる點に自己の愉快を感じ、自己の愉快を感じるの極、をり／＼興に乗じて途方もない遣り損ひ多く、をり／＼圖に乗りて意外の敵を作ること多く、多けれど本人さらに何とも思はずして、ます／＼平氣に頑健の名を恣にすされど實際の彼奴を知れるものは云ふ、あれは頑健の名の下に隠れたる圓轉滑脱の通人として、あれほど物事に分りの早く吞込の早い男なく、その利害に關せざるところも得失を論

ぜざるところも、つまり他人より見たる利害得失にして、彼としては絲爪の皮に等しく河童の尻に似たりと、また十年以上の知己は彼のために其不幸を嘆じて云ふ、願はくは彼をして平生の彼たらしめず眞面目に利害得失を考慮さすべきだけの地位を與へ責任を負はして生涯一度の大仕事をさせて見たしと、これは本人に語れば、彼は笑ひながら貰の塵を輪に吹いて曰く、心配してくれるな今日の乃乃は昔の青二才だ、四十五は鼻垂れ小僧、男盛りは眞ッ八十といふ唄があるぢやアないかと、

長谷川猛郎

常に不得要領の朦朧君なれど、嘗て二十六の時、鎌倉に前後二年間の參禪僧となりし事を思へば、この不得要領、また却て何等かの徹底より來りしにあらざるか、その朦朧た

るところに寧ろ人生の或意義を含めるが如く、ぶら／＼として居ながら未だ衣食に窮せず
 浮世に迫られず、ぼつとして居ながら未だ世に過られず人に欺かれず、また學を廢するに
 似たれど、をり／＼書を讀んで曉に達する事は必ず月の半を越え、殆ど世事に闇く人事
 に遠きが如くなれど、數字に明晰の頭腦を有して統計學上に専門家を凌ぐ點は、茫然たる
 表面に彼を知らざるものゝ意外とするところ、たゞ彼として數字にも統計にも禪三昧にも
 及ばざりしは例の愛妾お玉の一件のみ、

菅沼超

およそ今日の人格上に於て菅沼ほどの男なし、彼は生來いまだ會て戯れにも嘘を吐いた事
 なく、いかに自己の不利に陥り不幸に立至るも、その不利と不幸を免れむがために策を施

せし事なく工夫を廻らせし事なく、白日青天、彼の生涯に一點の疚き暗影なく、清淨潔白、
 彼の行爲に一點の顧みるべき懺悔なく、光風霽月、彼の身邊に一點の汚れたる痕跡なく、
 實に今日の社會としては珍らしくも君子の風あり、されど徒らに所謂お人よしと稱せらる
 る無能の善人ならずして、その善を世俗の惡辣に蹂躪されざる修養を備へ、其お人よしを
 周囲の好物に侮辱されざる用意を整ふ、もし人格の上より彼の適當なる地位を選べば、教
 育家と宗教家にあれど、彼の常に眉を蹙め面を皺めて最も嫌へるものは寧ろ今日の教育家
 と宗教家にあり、

松浪憲太郎

松憲君を當り觸りのない世間普通の一言に評すれば、罪のない面白い男にして、飯より酒

の好きな人といふべし、また一面より見れば、いはゆる世話好きに物事を引受けて交際場裡の名物男ともいふべし、さらに實際の彼を知るものより無遠慮に立入れば、その罪のない中に案外の罪深き悪戯を好み、をり／＼面白半分の人に道具外れを覘ふて喜ぶ風あり、柔かに世間の一部に彼を呼んで通稱まアさんといふは、松浪の松のまの字にあらずして萬事まア宜いよといふまの字と、まアどうかなるだらうといふまの字を併せてまアさんなりとすれば、彼も亦これ人間の處世上に自然の成行といふ事を道破せる一個の樂天家といふべし、但し彼の樂天主義は最も酒の上に遺憾なく發揮して、をり／＼酒のため餘りに樂天過ぎた滑稽を演じ失策を仕出來す點に寧ろ松憲君の天真爛漫を見るべし、加之も彼は無類の酒徒たれど、晝間は一滴も口に濡らさずして、芝居の師直式に勤むるところは我輩きツと勤むるといふところ大に稱すべく、さらに性質は師直式にあらずして寧ろ判官式の氣短

かに正直なるのみならず、其日の勤めを終りて夜に入りし松憲君は、いはゆるまアさんなり、この時に於て始めて罪のない彼は四邊かまはず傍若無人に活躍し來る、譽めて云へば精力家、お世辭で云へば交際家、世間の評判を其まゝ取次げば磊落的の才物、わるく云へば飲み助、そツと内證で云へば顔には似合はぬ案外の色男かと思はるゝ點もあり、蓋し彼は如何なる場合、いづれの方面より見るも常に絶えずニコ／＼とせる快男子なるを失はず、

浪六全集

第貳拾參編

大正十二年二月十二日印刷
大正十二年二月十五日發行



浪六全集第廿三編
定價金貳圓貳拾錢

著者
發行者
印刷者

村上信
東京市日本橋區小石町三丁目十四番地
加島虎
東京市京橋區西組馬町廿七番地
三浦猪平

發兌
東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
人形町通住吉町
東京市本鄉區
本富士町二番地

電話長本局三六六番二一六七番
振替口座東京一七四四番
電話濱町一九四九番
振替口座東京一六三六番
電話下谷二五〇二番
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店
至誠堂第一分店
至誠堂第二分店

會英秀社會式株所刷印

浪六先生の小説としての絶筆

時代相

時代相は今日の時代に於ける有らゆる階級の人間を捉へ來りて、浪六先生一流の痛快なる筆鋒を以て最も辛辣に赤裸々に遺憾なく社會各方面の内外表裏を曝け出ししもの、いかなる點にも何物にも憚らざる時代相の眞髓として近來稀に見る大文字なり

四六判特製美裝
紙數四百拾頁
定價貳圓六拾錢
送料金八錢

發賣所 東京本町 至誠堂 振替 東京 四七

浪六先生快著

牛肉一斤

生活の迫害と人心の不安とを免るべき新著にして興味と實益のエキス

著者曰く「牛肉一斤」の人體上に於ける滋養分と「牛肉一斤」と題せし本書の精神上に於ける滋養分と何れが多きや。現實に直接に讀者諸君の判斷を乞ふ」と浪六先生の著作中、本書は新なる特色を有するもの、興味津津たるうちに精神上の養となる著なり

四六判總クローズ製
紙數三百數十頁全
定價貳圓五十錢
郵税内地金十錢

裸體の人間

文明の粧飾を悉く剥ぎ取りて「裸體の人間」こゝに出でたり。製本また總ての無用なる粧飾を廢して趣味と實益の兩方面より内容を充實せしむ。浪六先生近來の傑作として人間あらゆる階級に薦む。

四六判上製全一冊
紙數四百拾頁
定價貳圓五拾錢
郵税金八錢

著者の大傑作

| | | | | |
|----------------------|----------------------------------|------------------------------|-------------------------------|----------------------|
| 篇五第十 | 篇四五第 | 篇三十第 | 篇一十第 | 篇一十第 |
| 男女の戦、同後篇、 明十年、唐獅子 | 元祿女、同後篇、 當世々、同後篇、 同後篇 | 原田甲斐、同後篇、 同後篇、武士道、 同後篇 | 夜叉男、大悪魔、う き世草紙、同後篇 | 毒婦、同後篇、續篇 仍如件、同後篇 |
| 篇十二 | 篇九十 | 篇八十第 | 篇七十第 | 篇六十第 |
| 罵倒録 放言録 | 天眼通 (後篇) | 天眼通 (前篇) | 十文字、同後編、 落花狼藉、煩悶病 院、同後篇 | 豊太閤 大阪城 |
| 篇五廿第 | 篇四廿第 | 篇三廿第 | 篇二廿第 | 篇一廿第 |
| 浮世車、同後 篇、うき舟 | 萬の新道、八重の 湖路、世間感想録 伊達殿子、同後篇 | 無遠慮 大正五人男 | 元祿 四十七士 | 裏と表 |

読書界を風靡せる

浪六先生著

縮刷 浪六全集

| | | |
|--|----------------------------------|--|
| 篇三第 | 篇二第 | 篇一第 |
| 川上三吉、同後篇、 同後篇、吉田雄蔵、 花車、品々め | 上田力、同後篇、同 續篇、倉橋幸蔵、 同後篇、司波編 | 當世五人男、同後 篇、黒田健次、同後 篇、同後篇、最後の 黒田健次、同後篇 |
| 篇七第 | 篇六第 | 篇四 五篇 |
| 最後の岡崎俊平、同 後篇、魚屋助左衛 門、呂宋助、衛門、 古賀中、武者無貨 | 鬼ささみ、やまと 心、日本武士、金剛 盤、同後篇 | 八軒長屋 (上卷) (下卷) |
| 篇十第 | 篇九第 | 篇八第 |
| 當世三人兄弟、同 後篇、うやむや日 記、元祿名物男、 同後篇、續篇 | 男山、同後篇、男 一匹、高倉長右衛 門、同後篇 | 居家 虞世 うき世の裏表 人間學 |

新式ポイント活字
袖珍特製箱入美本
定價各貳圓廿錢
郵税各八錢

4/2/32 H

浪六先生著

出 放 題

四六判上製美本 定價金 貳圓
紙數三百數十頁 郵送料金 八錢

輕快口を衝いて出づる著者
一流の樂天的放語を聞け!!

世の中に遠慮會釋
もなく、思ふまゝ
を八方八ツ當りに
吐き出したるも
の、著者の遺憾な
き本領こゝに在

浪六 自叙傳 我五十年

四六判特製美裝
紙數四百六十餘頁
定價金 貳圓八拾錢
郵 稅 金 拾

口 繪
著者自書自畫
コロタイブ珍品
十數葉

事實は小説よりも奇なりと云ふ語は始めて浪六先生の「我五十年」に證明せらる、生れて今日に至るまで人生の波瀾を極めし先生の一代記を最も大膽に最も露骨に告白せるも、机上の筆を以て書きしにあらず、現在身の以て著はせる五十年間の生證文にして所謂文士なるものの自叙傳にあらず。

~~489~~

F 13

MU 434

(3)

13
20
4

終

